

2-0279

特集ワイド

3月の本欄で、50年前の日本を空から見下ろしたイラスト本を紹介した。今回は、100年前に時計の針を戻してみたい。

週末、大雨に襲われた鹿児島・屋久島。有名な屋久杉の中に、巨大な切り株の内側から見上げるとハート形の空が見える「ウィルソン株」がある。その名は、発見者の英国人植物学者、アーネスト・ウィルソンに由来する。

ウィルソンは約100年前、中国や日本で多くの新種植物を見つけたプラントハンターだ。日本を

見上げてごらん



永山悦子



訪れたのは1914〜19年ごろ。大正デモクラシーが広がる一方、江戸情緒も残る時代。沖縄から樺太(サハリン)、朝鮮半島へ足を運び、植物の標本採取や写真撮影をした。当時の最新鋭カメラを使

むのが作家の古居智子さん。屋久島や沖縄などを巡り、それらを出版した。現在は、東京・上野の国立科学博物館で開催中の企画展「100年前の東京と自然」(6月16日まで)に協力する。

100年後の東京

い、植物とともに人々と周囲の環境も写したため、その頃の生き生きとした姿が残る貴重な資料だ。

ウィルソンの写真を手に足跡をたどり、今と比べる取材に取り組

ウィルソンの来日目的の一つがサクラの調査・分類だったから、東京周辺については春の写真が多く残る。神田川沿いで花見の様子を写した一枚は、出店や貸舟のに

古居さんによると、近代化を急ぐ日本の様子に、ウィルソンは「あまりに先を急ぎ過ぎている」と嘆いたという。当時の新聞のインタビューには、こう語っている。「も

し我々が写真や標本で記録を残さなかったら、100年後にはその多くは完全に消えてなくなってしまうだろう」

この100年、東京は、関東大震災、東京大空襲、東京オリンピックなど、街の姿が大きく変わる出来事が相次いだ。来年は2度目の東京五輪がある。企画展に並ぶ当時と今の写真を見ながら、100年後の東京を考えると、ウィルソンから「大丈夫？」と問われているような気持ちになった。

(オピニオングループ)